

未知数 x を定数とみて第 2、3 式を y, z について解くと

$$\begin{vmatrix} b_2 & c_2 \\ b_3 & c_3 \end{vmatrix} y = \begin{vmatrix} t_2 - a_2x & c_2 \\ t_3 - a_3x & c_3 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} t_2 & c_2 \\ t_3 & c_3 \end{vmatrix} - \begin{vmatrix} a_2 & c_2 \\ a_3 & c_3 \end{vmatrix} x, \quad (4)$$

$$\begin{vmatrix} b_2 & c_2 \\ b_3 & c_3 \end{vmatrix} z = \begin{vmatrix} b_2 & t_2 - a_2x \\ b_3 & t_3 - a_3x \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} b_2 & t_2 \\ b_3 & t_3 \end{vmatrix} - \begin{vmatrix} b_2 & a_2 \\ b_3 & a_3 \end{vmatrix} x. \quad (5)$$

そこで、(1) 式を $\begin{vmatrix} b_2 & c_2 \\ b_3 & c_3 \end{vmatrix}$ 倍したものに (4), (5) 式を代入すると、

$$\left(a_1 \begin{vmatrix} b_2 & c_2 \\ b_3 & c_3 \end{vmatrix} - b_1 \begin{vmatrix} a_2 & c_2 \\ a_3 & c_3 \end{vmatrix} + c_1 \begin{vmatrix} a_2 & b_2 \\ a_3 & b_3 \end{vmatrix} \right) x = t_1 \begin{vmatrix} b_2 & c_2 \\ b_3 & c_3 \end{vmatrix} - b_1 \begin{vmatrix} t_2 & c_2 \\ t_3 & c_3 \end{vmatrix} + c_1 \begin{vmatrix} t_2 & b_2 \\ t_3 & b_3 \end{vmatrix}.$$

この両辺には同じ形の式が現れるので、3 次行列式を

$$\begin{vmatrix} a_1 & b_1 & c_1 \\ a_2 & b_2 & c_2 \\ a_3 & b_3 & c_3 \end{vmatrix} = a_1 \begin{vmatrix} b_2 & c_2 \\ b_3 & c_3 \end{vmatrix} - b_1 \begin{vmatrix} a_2 & c_2 \\ a_3 & c_3 \end{vmatrix} + c_1 \begin{vmatrix} a_2 & b_2 \\ a_3 & b_3 \end{vmatrix}$$

で定義する。(1 行目に関する展開。) そうすると、上で求めた連立方程式の解の公式は、

$$\begin{vmatrix} a_1 & b_1 & c_1 \\ a_2 & b_2 & c_2 \\ a_3 & b_3 & c_3 \end{vmatrix} x = \begin{vmatrix} t_1 & b_1 & c_1 \\ t_2 & b_2 & c_2 \\ t_3 & b_3 & c_3 \end{vmatrix}$$

のようになる。

2 次行列式の性質から、3 次行列式の性質がわかる。

- (i) 線型性：行列式 $\det(\vec{a}, \vec{b}, \vec{c})$ は、各ベクトルについて分配法則が成り立つ。
- (ii) 交代性： $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ のうち 2 つのベクトルを入れ替えると行列式の値にマイナス符号がつく。
- (iii) 規格化条件：

$$\det(I_3) = \begin{vmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{vmatrix} = 1.$$

問 4.2. 未知数 y, z を 3 次行列式で表す公式を導け。

5 一般の行列式

n 次行列式を $n-1$ 次行列式に還元する形で、

$$\begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1j} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & a_{2j} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \cdots & \vdots & \cdots & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & a_{nj} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = \sum_{j=1}^n (-1)^{j+1} a_{1j} \begin{vmatrix} a_{21} & \cdots & [a_{2j}] & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \cdots & \vdots & \cdots & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & [a_{nj}] & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix}$$

と帰納的に定義する。ただし、 $[a_{2j}], \dots, [a_{nj}]$ とあるのはその部分の削除を意味する。(1 行に関する展開。)

行列式のサイズに関する帰納法で (2 次行列式の性質から 3 次行列式の性質を導いたのと同じ方法で) 次の性質を確かめることができる。

- (i) 線型性：行列式 $\det(\vec{a}_1, \dots, \vec{a}_n)$ は、各ベクトルについて分配法則が成り立つ。
- (ii) 交代性： $\vec{a}_1, \dots, \vec{a}_n$ のうちの2つのベクトルを入れ替えると行列式の値は符号が反対になる。
- (iii) 規格化条件：

$$\det(I_n) = \begin{vmatrix} 1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & 1 & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & 1 \end{vmatrix} = 1.$$

たとえば、 \vec{a}_k と \vec{a}_l ($k < l$) の入れ換えについての交代性を示すのであれば、展開式(定義式)の和の部分

$$\sum_{j \neq k, j \neq l} (-1)^{j+1} a_{1j} \begin{vmatrix} a_{21} & \cdots & [a_{2j}] & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \cdots & \vdots & \cdots & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & [a_{nj}] & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} \\ + (-1)^{k+1} a_{1k} \begin{vmatrix} a_{21} & \cdots & [a_{2k}] & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \cdots & \vdots & \cdots & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & [a_{nk}] & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} + (-1)^{l+1} a_{1l} \begin{vmatrix} a_{21} & \cdots & [a_{2l}] & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \cdots & \vdots & \cdots & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & [a_{nl}] & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix}$$

といった分け方にして帰納法の仮定を使う。あるいは、線型性を確かめたあとで、2つの列を等しいとした場合に値が0になることを示す。これは次の仕組みに基づく。

n 次列ベクトル \vec{a}, \vec{b} を変数とする関数 $f(\vec{a}, \vec{b})$ が \vec{a}, \vec{b} それぞれについて線型性(分配法則)をみたせば、 $f(\vec{b}, \vec{a}) = -f(\vec{a}, \vec{b})$ がすべての \vec{a}, \vec{b} について成り立つこと(交代性)と $f(\vec{a}, \vec{a}) = 0$ がすべての \vec{a} について成り立つことは同値。実際、交代性で $\vec{a} = \vec{c}, \vec{b} = \vec{c}$ とおけば、 $f(\vec{c}, \vec{c}) = 0$ であり、逆にこれがすべての \vec{c} で成り立てば、次の等式から交代性が従う。

$$0 = f(\vec{a} + \vec{b}, \vec{a} + \vec{b}) = f(\vec{a}, \vec{a}) + f(\vec{a}, \vec{b}) + f(\vec{b}, \vec{a}) + f(\vec{b}, \vec{b}) = f(\vec{a}, \vec{b}) + f(\vec{b}, \vec{a}).$$

問 5.1. $n = 4$ のときに上の3つの性質を確かめよ。

問 5.2. (#) 連立一次方程式 $A\vec{x} = \vec{t}$ の解 x_1, \dots, x_n は $|A|x_j = \det(\vec{a}_1, \dots, \vec{t}, \dots, \vec{a}_n)$ をみたす^{*29}。これを行列式の性質(列に関する線型性と交代性)から導け。

$m \times n$ 行列 $A = (a_{ij})_{1 \leq i \leq m, 1 \leq j \leq n}$ の転置行列^{*30}(transposed matrix) tA を ${}^tA = (a_{ji})$ で定める。

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \cdots & a_{mn} \end{pmatrix}, \quad {}^tA = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{21} & \cdots & a_{m1} \\ a_{12} & a_{22} & \cdots & a_{m2} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{1n} & a_{2n} & \cdots & a_{mn} \end{pmatrix}.$$

転置は二度繰り返すと、 ${}^t({}^tA) = A$ のように元の行列に戻り、列ベクトルの転置は行ベクトル、行ベクトルの転置は列ベクトルであることに注意。

例 5.1. 積の転置について、 ${}^t(AB) = ({}^tB)({}^tA)$ が成り立つ(積の順番に注意)。

実際、 $AB = C = (c_{ik})$ とし、転置行列の成分を ${}^t c_{ki}$ のように書けば、 ${}^t c_{ki} = c_{ik}$ などとなるので、

$${}^t c_{ki} = c_{ik} = \sum_j a_{ij} b_{jk} = \sum_j {}^t b_{kj} {}^t a_{ji}$$

^{*29} クラメル公式(Cramer's rule)と呼ばれ有名であるが、重要度は低い。他にも Cayley-Hamilton の定理というのがその類か。

^{*30} 転置行列を表す記号としては A^T のような書き方もあるが、これだと行列 A の T 乗と紛らわしい、かな。

より、 ${}^tC = {}^tB {}^tA$ であることがわかる。

行列式の性質として基本的なものが次の定理である。(証明については、節を改めて述べる。)

定理 5.2.

- (i) 線型性・交代性は行ベクトルについても成り立つ。
- (ii) 行に関する展開式、列に関する展開式が成り立つ。展開式の符号は chess board rule による。
- (iii) 転置行列の行列式は元の行列式に等しい。
- (iv) A, B を n 次の正方行列とすると、 $\det(AB) = \det(A) \det(B)$ 。

系 5.3.

- (i) 行列式の中に同じ行または列があれば、行列式の値は 0。
- (ii) ある行 (列) の定数倍を他の行 (列) に加えても行列式の値は変化しない。

行列式の具体的な計算においては、行あるいは列に関する展開を行う前に、上の系 (ii) の性質を利用して、特定の行あるいは列にできるだけ多くの 0 成分を含むように加工するとよい。連立一次方程式を解く際の消去法に似ていることに注意。

例 5.4. 4 行 4 列の計算例。途中経過を変えることで検算にも利用する。

例 5.5. 三角行列 (triangular matrix) の行列式。

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & \dots \\ 0 & a_{22} & a_{23} & \dots \\ 0 & 0 & a_{33} & \dots \\ 0 & 0 & 0 & \ddots \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} a_{11} & 0 & 0 & 0 \\ a_{21} & a_{22} & 0 & 0 \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} & 0 \\ \vdots & \vdots & \vdots & \ddots \end{vmatrix} = a_{11}a_{22} \dots a_{nn}.$$

問 5.3. $|tA| = t^n |A|$ を示せ*31。

問 5.4. (#) 座標平面内の 3 点 (a_i, b_i) ($i = 1, 2, 3$) が同一直線上にないとき、この 3 点を通る円の方程式は

$$\begin{vmatrix} x^2 + y^2 & x & y & 1 \\ a_1^2 + b_1^2 & a_1 & b_1 & 1 \\ a_2^2 + b_2^2 & a_2 & b_2 & 1 \\ a_3^2 + b_3^2 & a_3 & b_3 & 1 \end{vmatrix} = 0.$$

問 5.5 (*). Vandermonde 行列式の計算。右辺の鳥居のような記号 (\prod の大文字) は、積をとる操作を表す。

$$\begin{vmatrix} 1 & \lambda_1 & \lambda_1^2 & \dots & \lambda_1^{n-1} \\ 1 & \lambda_2 & \lambda_2^2 & \dots & \lambda_2^{n-1} \\ \vdots & \vdots & \vdots & \dots & \vdots \\ 1 & \lambda_n & \lambda_n^2 & \dots & \lambda_n^{n-1} \end{vmatrix} = \prod_{1 \leq i < j \leq n} (\lambda_j - \lambda_i).$$

*31 そそっかしい人は、 $|tA| = |t| |A|$ などとやらがす。その点、 $\det(tA)$ だとさすがに慎重になれるかな。